
リリカルなのは～グランガイツの息子～

れおん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルなのは〜グランガイツの息子〜

【Nコード】

N8206Y

【作者名】

れおん

【あらすじ】

リリカルなのはの二次小説

オリ主が嫌いな人は遠慮してください

第一話（前書き）

前回の作品を消してしまった（続き）ので新しく書きました

第一話

ハルトSide

「おはよう、公開意見陳述会まで残すところあと7日だ。地上本部に色々な世界の重鎮が集まってくる。正直非常に面倒だが仕事は仕事だ。各自与えられた仕事をしっかりこなすように。以上だ、解散！！」

朝の朝礼を終わらせて部隊長室に向かった。

「ゲンヤさん、はつきり言っておれっつて絶対あんたの仕事ですよね？」

「まあいいじゃねえか。お前が面倒だからっつて受けてない魔導士ラシクの試験ごまかしてやってるんだから」

「はあ、ま、仕方ないか」

「わかりました。この事は触れないでおきましょう。ギンガも6課に出向させたらいいですね。どうするんですか？俺たちのメシ。」
俺は基本的にゲンヤさんの家でメシを食わせてもらっている。

「しらん。お前の彼女に作ってもらえ、俺は自分の分くらい作れる。」

「地獄に落ちろ！！」

そう言い残し俺は部屋を飛び出した。

まだ朝メシ食ってないのに

とりあえず、向こうが忙しくて無理な事はわかっているがとりあえず連絡してみた。

「あゝもしもし？はやて、今時間ある？実はさ今日の晩飯がないっつてことが今決定しちゃったんだよ。え？6課にメシ食べに行っているの？ありがとう！！」

メシ確保が決定したので仕事に戻ることにした。

「今日の仕事はこれで終わり、今日は出勤もなく無事終わったな」

そして今俺は部隊長室に来ている「失礼します、ゲンヤナカジマ部隊長殿、今から出向させたギンガの様子を見えます。」

「んで本当のところは？」

「なんかはやてが6課でメシ食わせてくれるっていうからちよつと行ってくるわ。じゃあな！！」

車庫に入ってた俺のバイクに乗って6課の隊舎に向かった

「もしもし？ギンガか？実は今からそっちに行くんだけどさちよつと遅くなるってはやてに言っておいてくれる？あ、理由？ヘルメット忘れて管理局に追っかけられてるから撒いたらそっちに向かう。じゃよろしく。」

ギンガSide

「あれ？もしもし？もしもし…きれた。」

ハルトさんからの電話は一方的にきられた

「ギンガ、どないしたん？」

ちようどはやてさんが歩いてきた「あ、はやてさん実は今ハルトさんから電話があつてヘルメット忘れて管理局に追っかけられてるから撒いたらこっちに来るそうです。」

「はあゝハルトって副隊長になつてもなんもかわらんなあ。後でちよつとお話しなあかんかもな。管理局の人間が管理局に捕まるって絶対あかんやん！！」

「はやてさん、前から聞きたかつたんですけどハルトさんのどこを好きになつたんですか？」

「ここでその話はあかんよ！！…誰も聞いてなかったやるか？」

辺りを見回すはやてさん、あれ？今スバル達がいたような、教えた方がいいのかな？でもまあいつか別に悪いことじゃないし。

私はスバルを見なかったことにした

数十分後

「八神部隊長、お客様がお見えになりました。」

ハルトさんやつと着いたんだ。

「ほなちよつと迎えに行つてくるわ。ギンガご飯運んどいてくれる？」

「わかりました。」

はやてさんは歩いて迎えに行つた

「なあギンガさつきはやてと話していたのって誰の事だ？もしかしてはやてに彼氏がいるのか？」

ヴィータさんがいきなり聞いてきた

「ヴィータさんまで聞いてたんですか？」

「で、本当のところはどうなの？」

フェイトさん…まあ小さな頃からの親友だったって聞くし興味あるのかな？

「今から来る人にそれを聞いてみたらどうですか？」

ちよつど私がそういつた時にははやてさんが戻つて来た

ハルトさん頬つぺた真つ赤だ

「どうも陸士108部隊副隊長のハルト〃グランガイツだ、今日は本日から出向するギンガナカジマとその妹のスバルの様子を見に来た。ついでに晩ご飯をご馳走になる。よろしく!!」

「グランガイツと言うとゼスト〃グランガイツの息子か？」

シグナムさんが尋ねた

「ん？なんだ親父のこと知ってんのか」

「ああ地上ではかなりの有名な人だからな。」

「まあ8年も前に死んじまったよ。武人だから不器用な人だった、湿っぽくなっちゃったな、すまない。何か他に聞きたい事あるか？」

「は、はい。ハルトさんどうして頬つぺたが真つ赤になってるんですか？」

エリオが勇気を出して質問に行つた。

「これはな……交通ルールをまもらなかった結果だ。」

嘘だ。ルールを守らなかつたのは本当だけど絶対はやてさんにビン

タされてる

「はぁーい、次はリインの番です。はやてちゃんとはどういう関係なのですか？」

多分この場にいる全員が一番聞きたかった質問だと思う、私は知ってるけど

「婚約者で（スパーン）すみません、本当は『108部隊におつた時の同期や』です。」

神業的なタイミングでかぶせた！！「グランガイツ、私と一つ模擬戦をしてみないか？」

「明日の朝でいいですか？俺そこら辺で寝とくんで、それより先に晩ご飯を頂きたいんだが。」

そう言い残しハルトさんはご飯を取りに行った

「ねえ、ギン姉、本当はどうなの？あの二人って、」

スバルがよって来て聞きにきた

「他の人に言っちゃダメよ？本当は3年前から付き合ってるらしいの。」

「やっぱり付き合ってたんだね」スバルだけが聞いていると油断していたらみんなに聞かれていた

ハルトさんはご飯を食ってるしその横で楽しそうに話しているはやてさん、あの二人をみたら誰だってわかる気がするけど。

「あの男は強いのか？」

「それが私ハルトさんが戦っているの見たことないんです。登録は陸戦S+だけどこまかしているって言うか試験をさぼってて本当はSSS+って言うてたし、ただ武器は剣らしいです。後は魔力量が異常に少ないらしいです。」

「魔力量が少ないのにS+ってかなり凄いいんじゃないですか？」

「それも嘘じゃねえのか？」

ヴィータさんが刺のある言葉を投げ掛ける

「それは全て明日の模擬戦でわかることだ」

明日に備えて私達は先に部屋に戻った。

ハルトSide

現在俺はメシを食べおわり隊舎の外をはやてと歩いている

「なあはやて、公開意見陳述会の前日に会えないか？警備で来るんだろ？どうしても伝えておきたいことがあるんだ。」

「それは今じゃあかんの？」

「今じゃダメなんだ。いいか？」「かまへんよ。」

「ありがとう！！それにしてもはやてが部隊作ってもう半年くらいたつのか？早いもんだな。」

「そうやね、でも私一人じゃここまでこれんかった。なのはちゃんにフェイトちゃん他にも色んな人の協力があつてこの部隊は成り立ってるんや。」

「そつか、じゃあ俺も明日の模擬戦本気でやるかな。」

「ケガさせたらあかんよ？」

「善処するさ。…よし、隊舎に戻るか、俺はどこで寝たらいいんだ？」

正直食堂ではさすがに寝れない

「ほなわたしの部屋で寝る？」

「俺は今さらって感じだから構わないがお前の部隊長としての立場悪くなるんじゃないのか？男を連れ込んだとかで。」

「ほんまやなあ。じゃあ部隊長室と一緒に寝よか、ここやったら万が一にみつかつても言い訳できるし。」

まあはやてがいいならいつか

「別にはやては部屋で寝てもいいんだぞ？」

「あかんよ、だってこうして直接会ったのも久しぶりやのにちよつとくらい一緒にいたいやん。」

「じゃあ行くか、大事なお姫様に風邪引かれたら困るしな。」

「そう思ってるんやったら、もつとこまめに連絡入れたらどうや？お姫様攫われてまうかもしれんで？」

微笑みながらそう言うはやて

「もし、そんな事になったらとえ次元世界の最果てだったとしても助けに行つて見せるさ。」

「頼りにしてるでおうじ様!!」

はやてが後ろから抱きついてきた俺はそのままはやてを背負つて部隊長室に向かった。

外は肌寒かった筈なのに全く寒くない

この笑顔を守る為なら俺は命をかけて見せるさ

心の中でそう決心した

その日はそのまま部隊長のソファで二人で寝た。

第一話（後書き）

感想くれると嬉しいです

第2話（前書き）

ストックが大量に出来たので定期的に更新できそうです

第2話

俺が機動6課に泊まった次の日

「ふうゝ…朝か、はやてゝ起きろゝ」

「うゝん……………あ、おはよう、ふわあゝ。」

「そろそろ訓練スペースで模擬戦待ってるんじゃないのか？」

「そうかもしれないあゝ、シグナムは模擬戦すきやから、それにハルトのこと見極めようとしとんちゃうかな？」

「何の見極めだ？」

「ハルトがほんまにわたしにふさわしいかどうか。かな？」

冗談っぽく言ってくるはやて

「じゃあ気合い入れてくれるか？」

ギョッ

はやてを抱きしめた

「よし！！気合い入った。行くか、レイヴェルトセットアップだ」

「ここからバリアジャケットきて行くん？」

「…戦場で鎧を着始める戦士はいない。じゃあ行ってくる。ちゃんと見ていてくれよ！！」

俺は一人説明されていた訓練スペースに向かって行った

OTHERSIDE

ちょうどハルトが部長室を出て訓練スペースに向かい始めた頃

「色々あつて忘れていたが時間を決めていなかった。」

騎手甲冑を着ているシグナムに

「どうせ逃げたに決まってる！！」刺々しい言葉を言うヴィータ

静かに待つFW達と隊長達

「待たせたな。」

「てめえ遅い…ぞ」

ヴィータが怒鳴ろうとしたがハルトから溢れ出ている覇気のようなもの思わずひるんでしまった

「すまなかった、時間を決めていなかったのはこちらの落ち度だ。では始めるとしようか。テストロツサ、立ち会いをしてくれ。」

「はい。ルールはどちらかの先頭不能または降参です。」

「わかった」

「では、始め!!」

こうして模擬戦が始まった

「先手はもらう、はあっ!!」

始まったとたんに接近し切り付けるシグナム

「モード1 鋼鉄の剣」
アイゼン・メテオール

先程迄の細い剣とは違う盾のような剣

ガキンツ

シグナムの初撃は弾かれた

「今度はこちらから行かせてもらう。」

振り下ろした剣を剣で防ぐシグナム

「その対応は悪手だ。爆ぜろ、爆発の剣」
エクスフレンジョン

シグナムとハルトの剣がぶつかった途端に大爆発が起きた

シグナムは爆風で弾き飛ばされたが、なんとか空中で体勢を持ち直した

「この程度でやられないでくれよ。烈火の将、どうした? こないならこちらから行かせてもらう、モード3 音速の剣」
シルファリオン

お前にこの斬撃がさばきれるかな?

ハルトが剣を一振りすると7つの斬撃が飛び出した、実際には7回斬っているが振っている本人にはわからない。

「け、剣が見えない!!」

高速戦闘を得意とするフェイトですらも見ることができない剣

シグナムはじわじわと追い詰められていく

「レヴァンティン、カートリッジロードだ。」

「Ja」

「紫電一閃!!」

炎を纏った剣で斬り付けるシグナム

「モード5 真空の剣」
メルフォース

剣の一振りで突風が起こりシグナムは動けなくなった

「あんまり魔法は使いたくないんだが仕方ない、エクプロード・カタストロフ」

シグナムの周囲に3本の爆発の剣が出てきた

「チェック・メイトだな？」

「私の負けだ。」

シグナムの敗北宣言により模擬戦は終了した

「す、すごい。リミッターを付けてるとはいえあのシグナムさんが何も出来ないなんて。」

「ハルトさんってあんなに強かったんだ!!」

驚くエリオとギンガ

「ふう、疲れた。」

訓練スペースから戻って来たハルト

「お疲れ様、シグナムはどうやった？」

「かなり剣技を磨いたいるな。俺も本気で行かないとやばかった」

「グランガイツ、あのデバイスはいくつ形態を持っているんだ？」

「全部で10だ、まあ手加減して使わなかったわけじゃないから安心してくれ。おっと、もうこんな時間か、俺は仕事に行くから。はやて、約束忘れるなよ!!」

「わかってるよ、ヘルメットないんやから、タクシー使つかなかかって行きよ!!」

「わかった。」

そういつて歩きだすハルト

しばらく見ていると性懲りもなくバイクに乗って帰って行った

「あんのアホ!! 今度会ったときお話しなあかな。…ほなみんな

な朝練はせんと朝食食べにいこか」はやての指示でその場にいた全員が食堂に向かった

「なあはやて、あいつが最後に言っていた約束ってなんだ？」

食事を取りながら尋ねるヴィータ「わたしもよくわからのやけど公開意見陳述会の前日にどうしても会いたいらしいねん。」

「はやてちゃん、もしかしたらそれはプロポーズかもしれないわよ？」

シャマルの一言で場が騒然となる「プ、プロポーズ!!」

「そうなのか、はやて？」

「みんな落ち着き、シャマルが言ったのはもしかしたらって話やないの。」

「でも、もし本当にプロポーズだったらどうするの？」

「それは…（後でちよつとシャマル医務室行くな。）」

シャマルの横で小さな声で言った「（わかったわ。）」

「ほな、各自持ち場に行つて、わたしら機動6課は地上本部の警備やから、しつかり準備しとかなあかんよ。」

「……はい!!」「……」

「いい返事や。隊長達もお願いするな？」

「任せてよはやてちゃん。」

「大丈夫だよはやて。」

答えるのはとフェイト

「シグナムは一応後で医務室に来てね？一応だけど。」

「わかった」

「ほな、みんな今日も1日頑張つて行こか!!」

はやての一言で各自動き始めた

医務室

現在医務室にははやて、シャマル、シグナムそしてザフィーラがいる

「もし本当にプロポーズやったらどうしよか。」

「はやてちゃんはあの人と一緒になつてもいいの？」

「3年以上付き合って来たけどやっぱりそうおもてる。」

「ならば我等は主はやての思いを尊重するだけ、幸いあの男の剣には迷いや濁りは一切ありませんでした。」

「ありがとう、みんな、ハルトやったらみんな絶対仲良くできると思っわ。」

「この話はそこまでにして、後ははやてちゃんがプロポーズされてから考えましょう。」

この話は一旦終了した

第2話（後書き）

稚拙な文章ですが気長によんでください
誤字脱字は指摘してください
即日修正します

第3話（前書き）

連続投稿頑張ります

第3話

公開意見陳述会前日

約束どおりはやては俺の家に来てくれた

「話ってなんなん？」

そわそわしながら尋ねるはやて

「今日来てもらったのは大事な話を2つしたいからなんだ。少し聞いてくれるか？」

はやては頷いた

「今から19年前に地球の英雄の遺伝子を下に最強の戦士を作る。というプロジェクトをしていた違法研究所があつてな、英雄の名はアーサー王そしてゼスト」グランガイツの遺伝子を混ぜ合わせて実験は無事成功した。」

「う、嘘やる！！」

「本当なんだ、俺が唯一の成功素体三歳の頃に摘発に来たゼスト隊によつて俺は保護されてそのまま息子という形で育てられた、だからなはやて、俺はちゃんとした人間じゃないんだ。」

「そんなことない！！どんな過去があつてもハルトはハルトやし、ちゃんとした人間や！！」

涙をこぼした訴えるはやて

「ありがとう、俺ははやてに出会うまで最前線での命なんていつ失つてもいいと思つていた。でもお前に出会つて一緒に生きて行きたいと思うようになった。どんな時でも隣で笑つていてほしいと思うようになった、俺はどんなことがあつてもお前を守ってみせるだから、だからはやて、機動6課の試験期間が終わつて落ち着いたら俺と結婚してくれないか？」

俺ははやての左手薬指に指輪をはめた

「…はい！！」

はやてからの返事は肯定だった

「わたしもハルトと一緒に生きて行きたい！！だから…これからよろしく願います。」

俺がはやてにプロポーズをして一時間くらいして落ち着いたはやてが話を切り出した

「わたしの家族の守護騎士達も一緒に面倒みてくれるんやろ？」

おそろおそろ聞いてきたはやて

「あたり前だろ！！俺ははやての全てを受け入れる、はやての家族何だから当然だろ？そつえば名前どうする？はやてⅡグランガイツってなんか変だし俺が八神にかえようか？」

「それやつたらフェイトちゃんみたいに八神・G・ハルトとかにしたらどう？」

「名案だな。それじゃあ、明日は朝早いしそろそろ寝るか？」

「そつやね。」

その日俺たちは恋人から婚約者へと変わった

OTHERSIDE

はやてがハルトの家に泊まりに行ったあとの機動6課

明日は公開意見陳述会の警備ということもあり早い時間に訓練を終了していた

しかし、全員はやてのことが気になるのかそわそわしていた

「結局、今日呼ばれたのはなんだったんでしょつね？」

「私の勘だとプロポーズだと思つわよ？」

スバルが尋ねシャマルが答える

「はやてが出てもう三時間だぞ。何か連絡があつてもいいんじゃないのか？」

「ヴィータ落ち着いたらどうだ？明日にはわかることなのだから」

落ち着かずにつろつろしていたヴィータにいうザフィーラ

「そつえば、今日のがプロポーズだとしたら名前どうするんだろつね？」

「そっか、はやて」グランガイッつてなんか変だもんね。」

なのはやフェイトに至ってもこの状況、彼氏がいないとはいえ年頃の女の子という事だろうか

時計の針はもうすぐ12時を指そうとしていたころシャマルにはやてが預けていた携帯端末が光った

「はやてちゃんからのメールみたいね。」

「な、なんと書いてあるんだ？シャマル。」

一番反応が大きかったのはまさかのシグナムだった

「少し落ち着いたらどう？」

ちなみにエリオ、キャロ、ヴィヴィオはもう寝ている

「今から読むわね。え〜と、夜遅くにごめんね。でもみんなが気になつて寝れてなかったら困るから報告だけ、とりあえずわたし八神はやてはこの度婚約する事になりました。詳しい事はまた今度、みんな明日に備えてはよ寝てな。ですって」

「やつぱりプロポーズだったんですね！！なんて言われたんだろ？ティアなんて言われたと思う？」

「知らないわよ！知りたい事はわかったし私たちは先に寝ましょう、失礼しました。」

ティアナ、スバルは一足先に自室に戻った

「フェイトちゃん、私たちも戻ろうか？」

「そうだね。」

それに続くように部屋に戻ったのはとフェイト、ギンガはスバル達の前に部屋に戻っていた

現在食堂に残っているのはシグナム、シャマル、ザフィーラ、ヴィータの3人と一匹だけ

「よかった、はやてちゃん。」

涙を流して喜ぶシャマル

「おめでとうございます。主はやて。」

心からの賛辞を贈るシグナム

「まだ、あの男を認めたわけじゃないけどはやてが決めた事だ、は

やてを泣かしたりしたらぶっ飛ばしてやる。」

大好きなはやての事だから幸せになってほしいと思うヴィータ

「……………」

無言のザフィーラ

表現の仕方にこそ違いはあるものの全員がはやての幸せを祈っていた

それから各自部屋に戻った

食堂には誰もいなくなった

第3話（後書き）

感想募集中

第4話（前書き）

しばらくは定期的に更新
後は野となれ山となれ

第4話

公開意見陳述会当日

参加者である俺は開会一時間前、つまりは13時に向こうにいればいい。しかしはやて達機動6課は朝から警備という事でついに行つた。「とりあえずはやて、俺はそこら辺の知り合いに挨拶兼暇潰しとくから自分の部隊行つてこい。」「わかった、ほなね。」

はやては到着前にきていたらしくヘリポートに向かつた

「レジアス中将、お久しぶりです。本日はよろしくお願いします」

「オーリス、俺は夢を見ているのか？ハルトが敬語を使っているのだが。」

俺が敬語使うのそんなにおかしいか？

「流石にカメラがある前で中将相手にタメ口はどうかと思つてな、敬語を使つてみた。」「そうか、今日の陳述会には参加するのだから？」

「ああ、なぜか胸騒ぎがする。だからこつそりデバイス持つて入らせてもらうな。」

「仕方がないな、ただばれるなよ。俺も少し仕事があるからな、行くぞオーリス。」

レジアスのおっさんは歩いて行つた

そろそろ中に入つておいてもいいかもな、

「おい、ハルトー！聞いたぜ、八神の嬢ちゃんの事」

ゲンヤさんが俺のところに歩いてきた

ちなみに現在地は地上本部の入り口付近

「耳が早いっすぬ、スバルですか？ギンガですか？」

「まあそんなところだ。しかしお前もう中入るのか？まだ2時間もあるぞ？」

「する事がなかったもんで。」「よし！！なら俺が局員同士の結婚で上手くやっていくコツ教えてやるよ。」

「ありがとうございます」

確かにこれから結婚するに当たってはやてを家庭にあまり縛り付けたくないからな

ゲンヤさんが初めて尊敬出来た気がする。

「とりあえず一番簡単な方法はある程度出世して自分の補佐にするのが一番いい。安全だしな。」

簡単って出世は簡単じゃない気がするんすけど…

この話はしばらく続いて終わったところにはもう一時間前だった

「俺は中に行きますけどゲンヤさんはどうします？」

「後の事は若い奴らに任しておくから俺は外で指揮に当たっておくさ」

「わかりました、では」

ゲンヤさんとの会話を終了して俺は会議場に入った
議題はインヘリアルの方が主になって来るだろう。

こうして胸騒ぎはおさまることなく公開意見陳述会が始まった

陳述会が始まって四時間

「結局胸騒ぎは勘違いだったのか？」

その時

「外部からの攻撃です！！中将一度避難を」

ピンクの髪秘書に連れられて中将は奥に退避した

俺は携帯端末を取り出しゲンヤさんに連絡を入れた

「現在の状況を教えて下さい。」「戦闘機人とガジェットの攻撃を受けて混乱している。」

「今から魔力リミッターを解除するんで、そっちは頼みます」

俺は急いで中将の後をおった

「レイヴェルトセットアップ、リミッターを解除してくれ。」

「承知」

バリアジャケットを展開するのはいつぶりだろうか

「あそこが控え室か!!」

ドアを開けて中に入って

「おっさん!!大丈夫!!かつ!!貴様戦闘機人か!!」

「あら、随分と早かったのね、見られたからには死んでもらうしかない」

しゃべっている戦闘機人を剣で気絶させた

「殺人の現行犯で貴様を逮捕する。」

戦闘機人をバインドで捕獲

「おっさん!!しっかりしろ!!」

「ハルトか…こ、これをぜ、ゼストに……」

一枚の紙を懐から出しておっさんは息を引き取った

くそ!!

「空に上がるぞ!!モード7羅刹の剣!!」
サクリファ

俺は壁を突き破って外にでた

「北西門付近を担当している全指揮官に継ぐ、今からハルト「グラ
ンガイツ」が作戦行動Eガジェット殲滅を行う、30秒で全ての局員
を下がらせて南東門に行かせる、繰り返しはない!!」

作戦行動Eとは指揮官訓練を終えている地上本部の人間に教えられ
る特殊作戦、一騎当千の魔導士がリミッター解除で殲滅を行うとき
の作戦名、この作戦への意見は不可能

「只今から作戦行動Eを開始する!!」

OTHERSIDE

新人の指揮官は迷っていた

「どうすればいいんだよ。」

彼は海の間人だからこの内容を知らない

「バカ野郎!!部隊の間人を全速力で下がらすんだよ、この作戦が
行われたって言う事は北西門付近は鎮圧だ」

何をばかなことを、と彼は思ったガジェットは目視できるだけで5
0はいるのだから

数秒後、男は度肝を抜かれる

「おらああつ！！！！」

剣に乗った魔力を集束させた斬撃は次々にガジェットを破壊して行った

数十分後

あれだけいたガジェットは殲滅され北西門付近は完全に鎮圧されていた

ハルトSide

北西の鎮圧を終えたときオープンチャンネルで通信が入った

「ミッドチルダ地上管理局員諸君、気に入ってくれたかい？」

「ジェイル・スカリエッティ！！」「ささやかながらこれは私からのプレゼントだ、治安維持だの、ロストログア規制だのという名目の下に圧迫され正しい技術の促進をしたのにも関わらず罪に問われた稀代の科学者達、今日の一撃はその恨みの一撃とでも思ってくれたまえ。地上の守護神、レジアス中将は死んだよ。」

「ふざけるなっ！！」

「ふむ、どうやらうるさい蟻がいるようだ、身の程をわきまえずに先ほどの事から何一つ学ばない、いま再び忌むべき敵を一方的に制圧できる力を見せて挙げよう」

その言葉の数分後に複数の戦闘機人が現れた

「こいつらは捕獲か？殺害か？どっちなんだゲンヤ！！」

ゲンヤSide

「ゲンヤさん！！ハルトどないしてもたんですか？」

「多分あいつは羅刹の剣サクリファを使っている」

「サクリファー？」

嬢ちゃんは知らないか、そうだな言われて見ればハルトの奴嬢ちゃんに会ったときからかなり変わったからな

「サクリファーってのは使用者の戦闘能力を格段に上げるが理性が効かなくなる、ハルトは使いこなしていたが使用時間が長すぎたなおいハルト！！そいつらは全員五体満足で生け捕りだ、」

ハルトSide

「私の最高傑作であるナンバースではないものの戦闘機人をたった一人で倒すと言うのか、滑稽だ、見給え全次元世界の科学者達よ、いまや管理局には己の力すらも知らない愚か者達がたくさんいるのだ、おそるにたらん、行け。」

長々しいスカリエッツィの演説の後数十体の戦闘機人が攻撃を仕掛けてきた

数が多いな

「モード2、3、7同時展開」

いくら体を強化したところで俺にかなう筈もないのにな

「はあゝっ!!」

爆発する斬撃を攻撃力を最大にした状態で7度うちこむ、当然気絶した

「貴様の最高傑作は大したことがないな。いくら体を強化したところで所詮は只の人間だ、武人にはかなわない。そうだな、10分もあればこいつら全員捕まえているからそこで暇そうに見てろ。」

十分後

「どうだ？貴様の最高傑作も所詮不意打ち程度にしか使えないんだよ。」

「くっ!!」

スカリエッツィは通信を切った

「全局員に通達する、スカリエッツィの言う通りレジアス中將は殺された、指揮系統は混乱するかも知れないが各自、己の部隊の指示を仰いでくれ。以上だ。」

俺も連絡を切った

「おい!!ハルト、お前何分サクリファアを使った？」

「さあな、覚えてない。」

「とぼけるな!!」

「ゲンヤさんなんでそんな怒ってるんですか？」

「サクリファアはな使用者の命を削るんだよ…」

ゲンヤさんははやてに真実を言ってしまった

はやてSide

「サクリファ―はな使用者の命を削るんだよ…」
その言葉を聞いたとき頭の中が真っ白になった

「え…それどういうこと？」

「はやて、それは6課に行ってから話そう。今は襲撃を受けたそっちの方が心配だ。」

ハルトに言われて思考力が戻ってきた

確かにそうや機動6課も襲撃を受けてザフィーラとかとも連絡がとれん

わたしはハルトと一度6課に戻った

第4話（後書き）

感想随時募集中

第5話（前書き）

ストックが…しかしまだまだ続けます

第5話

はやてSide

機動6課が襲撃にあつてから1週間今は前線メンバーをアースラの中の会議室に集めてる

「ほな、説明してもらつてええか？作戦行動Eとハルトのデバイスについて」

「作戦行動Eって言うのは地上の限られた人間にのみ教えられる作戦名だ、この作戦が発令された場合意見する事は不可能、この作戦中は許可なしの殺害がゆるされている。」

淡々と告げるハルト

「今までこの作戦が行われた事は？」

「さあな、少なくとも俺が使ったのは今回が初めてだ。」

「その事はわかった。ほんなら次はハルトのデバイスについてや、命を削るってどういうこと？」

「レイヴェルトはな、テンコマンドメンツって言う魔法を使う為の剣だ、全てで10の形態がありその中には命を削るものもあるって事だ。」

「目安は？」

「そうだな、大体1分1日つてところだ。」

「ごめんやけどちよつとだけ前線メンバー外してもらていい？」

わたしは前線のみんなを外に出した

「ハルト！！なんでわざわざそんな命削るような剣使ったん？ハルトやったら他にも使える武器沢山あつたはずや！！」

ハルトSide

「ハルト！！なんでわざわざそんな命削るような剣使ったん？ハルトやったら他にも使える武器沢山あつたはずや！！」

涙を流しながら俺に訴えるはやて「あの時はレジアス中將を殺された怒りで我を忘れていた、お前にずっと笑っていてほしいって言っ

たばかりなのにまた泣かしちまったな。」

はやてを強く抱きしめる

「もう、あのサクリファアは使わへん？」

「ああ、天でも、神でもなく俺ははやてに誓う、サクリファアはもう使わない、だから…笑ってくれないか？」

「どないしよかな〜そやなあハルトがここでキスしてくれるんやったら笑ってあげる。」

「こ、ここで？」

誰もいない事はわかったいても周りを見渡してしまった俺

付き合ってもう4年だからいまさらキスがどうかではないがやっぱり職場は厳しい

「ここで」

「…じゃ目閉じて」

「ん、」

目を閉じて待っているはやて

ーチュッー

俺ははやての唇にキスをした

「これでいいか？」

「うん。」

はやては満面の笑みを俺に向けてくれた

その後数分して前線メンバーが帰ってきた

「出勤は本日中になると思う、何か質問は？」

特にないみたいだ

「ほな、解散！！」

現在俺は機動6課の応援という形でここに来ている

「はやて、実は空に出たらずつとはやてを守っていてやりたいんだがその前になんとかして親父にあって目を覚まさせないといけない、だから少しだけ待っていてくれ。」

俺はアラートがなる前に親父を探す為、アースラを出た、

「親父がいそうなところか、多分あそこだな」

俺は親父が一番いそうなところ、つまりゼスト隊の隊員たちが眠る墓地を目指した

ミッドチルダ墓地

「やっぱりここに居たんだな、親父。」

「久しぶりだな、ハルト。」

「レジアスのおっさんからの最後のメッセージ…まあつまりは遺書だな。読んでくれ。」

レジアスのおっさんの遺書を読み始めてしばらくして親父はなきはじめた

「そうか、やはりレジアスは無実だったか、俺は気付くのが遅すぎた。ハルト、ルーテシアという娘のことを頼んでいいか？」

「生憎俺には守るものが出来ちまってな、そっちは自分で守ってくれ。」

「俺には時間がないのだ！！」

「体のことなら心配するな、今こそ聖剣レイヴェルトの封印をとく、今一度、彼の者に守りたいものを守る力と時間を！！」

レイヴェルトから出た銀の光が親父を包みこんだ

「気分はどうだ？」

「体に力が溢れてくる、これならばルーテシアを助ける事ができる。アギト」

親父の後ろにいたユニゾンデバイスがでてきた

「俺はこの通り大丈夫だ、だからお前は自分にもっともふさわしいであろうマスターシグナムの下に行け！！」

「旦那！！……わかった。旦那はルールーを助ける為に頑張るんならあたしも頑張る。ハルト、あたしをシグナムのところに連れていてくれ！！」

「わかった、親父、死ぬなよ。」「わかってる、…お前は立派な

男になった、これからはお前の守りたいものを命懸けで守って見せる！！」

俺は振り返らずに飛び去った

「ところでアギト、お前はシグナムのユニゾンデバイスとして生きて行くのか？」

「多分そうなる。」

「そうか」

八神家の方針的な事から考えるとアギトは新しい家族になるのか

その後アギトはシグナムのユニゾンデバイスとなり俺の代わりに地上を守ってもらうことにした、

アラートがなった

「機動6課、出動や！！」

俺たちの任務はフェイトがスカリエッティの逮捕、なのはは保護児童のヴィヴィオって娘の救出、ヴィータは駆動炉の破壊、はやてはゆりかご付近の上空の安全確保、そして俺ははやての護衛だ

フォワード達は戦闘機人の保護

ルーテシアって娘は親父がいる

「なのは！！ヴィータ！！俺とはやてが援護するお前達は早くゆりかごの中に入れ！！モード5双龍の剣」
フレックリムン

温度差の違う2つの斬撃を飛ばしトンネルを作った

「早く行け、ヴィータ、なのは、ヴィヴィオを助けてやれ！！」

「無事、ゆりかごの中に入れました。」

通信士の言葉を聞いて俺は安心した

自分があこのトンネルを使った事はあるけど他人に使わせるのは初めてだったから

「よし、はやてガジェットなんかとつと片付けて2人の援護に行こう！！」

「そつやね。」

第5話（後書き）

無謀にも新たに一本考え中

第6話

「はあっ！！これで大方掃除は終わったか？」

ゆりかごを囲むようにわいてくるガジェットも数が減ってきた

「はやて！！もしかすると駆動炉をやったのかもしれない、そうならヴィータが心配だ先行して救出して来い。…なに安心しろ、少し掃除してから行くだけだ、必ず追いつく。」

「わかった」

リインとユニゾンしたはやてはガジェットを避けてゆりかごに入った
「行くぞ空戦魔導士ども、ここが攻めどころだ一気にガジェットを始末する！！」

「はいっ！！」

メル・フォース

「真空の剣」

剣から真空波を出してガジェットを斬る
他の魔導士達も恐れず立ち向かっている。

「一尉ここは自分達に任せてあなたも中へ」

「そうだな、全員死ぬなよ。」

「はい！！」

ブレイクリムゾン

「双龍の剣」炎の壁を作り俺も中に入った

「魔力結合を解除しました、」

「聖王が消えたらそうなるのか、こりやますますはやて達が危ないな…久しぶりに行くか、重量の剣」
グランドティファ

速さを捨てた破壊力に特化した剣「おらああっ！！」

力任せに壁を破壊して進むことにした

「はやて！！どこだあっ！！」

「ここや！！」

入り口から直線で進んだところでユニゾン解除されていたはやて、
なのは、リインそしてヴィヴィオを発見した

「迎えに来ました！！」

スバルとティアナも到着した

「脱出するぞ」

スバルがなのはを背負いティアナははやてをバイクの後ろに乗せて出口に向かう

「こちら八神、クロノ君ゆりかごの方はどないや？」

「間に合わない！！このままでは軌道上に出てしまう。」

「そんな！！ヴィータが駆動炉壊してなのはちゃんはヴィヴィオを助けたのに結局間にあわへんのか」「はやて、俺に任せてくれ、俺が今からゆりかご消してくる。」

「！！どうやって、まさかテンコマンドメンツって言う魔法使うんか？」

「よくわかったな、この魔法は使うとよくて数年、下手すりゃ一生魔法を使えないかもしれない、でも例え魔法を使えなかったとしても俺は俺だ、だから行ってくる。」

「…わかった、ハルトがそこまで言うんやったら止めへん、ただ約束して、絶対帰って来るって。」「わかってるさ。」

俺はゆりかごの正面に来た

「クロノ・ハラウン後何分だ？何分で間に合う？」

「3分だ」

「そうか、なら俺が半壊で3分後に軌道上に送ってやるさ。」

「レイヴェルト、リミッター解除、モード1から10までを同時使用行くぜ、稀少技能時間操作四倍速、七つの星に裁かれる、七星剣（グランシャリオ！！）」

極大の魔方阵を空中に描く為の布石、リンカーコアとは違う物を使う魔法

「準備は整った、我、十戒の剣の担い手、今こそ全ての力を解き放ち我に大切な者を守る力を、究極魔法技テンコマンドメンツ」

空中に描く極大の魔方阵から砲撃が降り注いだ

「…やったのか？クロノ、どうなった？」

「君は、まさか…いや何もない、無事間に合う、君のおかげで航空部隊は配置が完了した、礼を言わせてもらう」

「そうか、守れたのか、でも体に力が入らないな、すまないが誰か拾ってくれないか？空今飛べねえから、」

現在俺は全ての力を使った為に重力による自由落下の最中だ

「おっと、大丈夫か、ハルト」

人間の状態のザフィーラが受け止めてくれた

「ザフィーラか、すまないがこのまま運んでもらっていいか？」

「…承知した」

ザフィーラには言っていないが今の俺は魔法とレアスキルの反動で目が霞んでいるし、満身創痍だ

「ハルト！！大丈夫か？」

「…はやてかこの通り元気だ、だから安心しろ」

「ハルト…嘘や全然元気やない、だってハルトが向いてるとこ何も無いやないの。」

「ははっ、ばれちまったか、レアスキルと魔法の代償でしばらくはこんな感じだわ、すまねえけど病院手配しといってくれないか？」

俺は意識を手放した

OTHERSIDE

こうして後にジェル・スカリエツィ事件、通称JS事件と呼ばれる事件は無事解決した

それから1週間

修復された機動6課の医務室にハルトはいた

「体は大丈夫なん？」

「ああ、目も元の状態に戻ったし体も大丈夫だ、ただ一年半はリンカーコアの使用禁止だそうだ。」

「体が元気になったんやったらちよつと聖王協会まで付いてきてもらうで？」

「どうしてだ？」

「ハルト、レアスキルの申請してへんやろ？それにわたしのお義父さんになるゼストさんにも挨拶いかなあかんし。」
ゼスト「グランガイツはJS事件の最後に管理局に協力した、と言うことで無罪となり聖王病院で治療を行っている
「そうだな、じゃあ行こうか」

聖王協会

「騎士カリム、騎士はやてがやって来ました」
カリムの部屋にはクロノ、カリムがいた
「失礼します、ハルト」グランガイツを連れて来ました。
「ご苦労様はやて、それからはじめまして、カリム・グラシアです。レアスキルの登録のついでで失礼ですが、この度は婚約おめでとうございます。はやては私の妹のような存在なので本当に嬉しく思っています。」

「どうもはじめまして。自分はハルト」グランガイツです。」
無難な挨拶をするハルト

ハルトSide

俺は今聖王協会の理事室に来ている、レアスキルの登録の為に来たはずなんだがな。

「レアスキルの登録ってこんなに面倒なんですか？わざわざ理事にあわなくちゃ行けないなら帰りたいんですけど。」

「ハルト？あかんよ、だってわたしもまだちゃんと詳しいこと聞いてへんし。」

「じゃあ説明します、俺のレアスキル時間操作は自分の体の時間を早くするんです。心臓の動きを速くしたり遅くしたりで身体能力を格段にあげる事が出来ます、ただ使用後は疲労感やひどい時は気絶します、こんなものでいいですか？」

俺は全て説明したから部屋を出ようとした

「あなたの魔法の形式は、古代ベル力式でもミッドチルダ式でもないことはどうしてですか？」

「あれは特殊です、普段はベル力式です、ただ証明するにも医者から一年半はリンカーコアを使用するなって言われたので、すみません。」

「そうよね、あなたのおかげで無事ゆりかごを破壊する事が出来たんだし、ありがとう、それからお幸せにね。」

カリムに見送られて理事室を出た俺とはやてはそのまま親父の病室に向かった

「おっす、元気にしてるか？」

「ハルトか、お前のおかげでルーテシアを救うことが出来た、更正プログラムを終えて出てくるのが2ヶ月後だ、その頃には俺も退院してる、その後はメガーヌが元気になるのを二人で待っておくさ」

「今後こそ守り切れよ、そうだ、紹介するよ、八神はやて半年後に結婚する予定の婚約者だ」

俺がそういうとはやてが入ってきた

「や、八神はやてです」

「なるほど君が、シグナムに言っておいてくれ、アギトのことは任せた、と。それからこいつは家事すらできない怠け者だが愛想尽かさないでやってくれ、結婚おめでとう。」

親父の口から飛び出したのは世間一般の親父が言うような言葉だったまさかそんな気の効いた言葉を親父が言うとはおもいもしなかった

「まあ、半年後には結婚してるから、よろしく頼む」

親父にはお大事に的な言葉は言わなくても元気だから敢えて言わなかった

「なあはやて、すむ家とかはどうする？シグナムやヴィータ、シャルとザフィーラ、それにリインとアギトが住むとなるとなかなかの広さがあるしお前の家も俺の家も無理だ、サイズの」

「じゃあ家はハルトが探してくれる？わたし的には海の近くがいいわあ」

はやてと違い俺にはこれから一年半の時間がある、理由はドクターストップ+ゲンヤさんの気遣いだ「わかった、なら俺に心当たりが

ある、いくつかリストアップして来るから待っていてくれ、まあ明後日には6課の隊舎に行けると思う」

「ハルトが真面目になんかしてるのって珍しいな!!」

「俺が面倒なのは自分のことだけだからな、まあ細かい事はまた今度話そうぜ」

「今度の休暇を利用してなのはちゃんとフェイトちゃんが地球戻ると言うてたからわたしも戻ろう思ってるねん、仲のよかった人に紹介したいし。」

はやてが投影ディスプレイのスケジュールを見せて言うてくる

「俺は長い長い休暇があるから問題ないぞ。じゃあまた明後日」

はやてに挨拶をして俺は昔知り合った不動産屋のところに向かった

第6話（後書き）

感想随時募集中

第7話（前書き）

題名って付けたほうがいいんですかね？

第7話

二日後

独身だらけの部隊の中で新しい家の話をするのは気がひける、というところで俺はいま八神家のみんなとリビングで話をしている

「家のことなんだがな、知り合いの不動産を脅し…頼ってみたらなんか、今度金持ちように家を建てようとしたとか言う土地がミッドチルダ南部の海沿いにあったから穩便？に話会ったかいもあり売ってくれるそうだ、ただ家は自分たちで建てろってさ。」

「それは、絶対穩便に話会った結果じゃないでしょ？」

やんわりと指摘するシャマル

「まあこの際そんな事はどうでもいいんだ、問題は」

「誰が家を建てるか？やね。」

「違う違う、家は俺が建てる、昔自分の家を自分で作るうとして大工のところで修行していた事がある、本当に問題なのは、デザインと間取りだ。残念なことに俺にそういう才能はないぞ。」

誰も自身がないのか名乗り出ない

「ほな、わたしとリインがやってみよか。」

「はいですう！！一緒に頑張りましょう、はやてちゃん。」

「ならば私は材料を調達するでしょう、ハルト、手伝ってくれ」
ザフィーラは材料の調達か

「そうなると私とヴィータは建築の手伝いだな？」

「そうみたいね、なら私ははやてちゃん達のお手伝いに回るわ」

「ほなアギトもよろしくお願いね？」

「おう！！自分たちの住む家だ、一生懸命建てるぜ。」

みんなが手伝ってくれることになった

「これが俺たちの最初の共同作業だな、みんな！！立派な家にしような！！」

こうして更地に家を素人が建てるという無謀な計画が始まった

翌日

「ザフィーラ、はやて達のデザインと間取りが半分終わっているって言うのは本当なのか？」

「ああ、主とリインが昨夜言っていた」

今日は木材を仕入れる為にミッドチルダ郊外の資材売り場に来ていた。交渉の結果しばらくの間お世話になることになった

翌日、はやて達のデザインと間取りが完成したので本格的に建設に取り組むことになった

ほとんど素人という事もあり難航が予想されたがシグナムとヴィータの予想外の活躍により着実に建設が進んで行った

そして、はやての知り合い達に婚約の挨拶に行く日になった

「ねえハルト君、家を自分で建てているってホントなの？」

集合場所で会って最初に聞く事がそれかよ

「まあ、事実だ。みんなに手伝ってもらっているけどな、その子が必死に助けたした、たしか：ヴィヴィオだっけ？」

なのはがヴィヴィオを助け出した時には一度見てはいるがその後しばらく目が見えてなかった事もありしっかりと顔を見るのは初めてだ

「そうだよ、ほらヴィヴィオ、しっかり自己紹介して？」

「高町ヴィヴィオです、」

「そうか、俺はそろそろ八神・G・ハルトになるんだがまあ、ハルトおじさんとも呼んでくれ、」「うん！！また後でね、ハルトおじさん。」

フェイトが来たのを確認するとヴィヴィオは走って行った

「ヴィヴィオには優しいんやね？」

「はやて、もう来ていたのか、ヴィヴィオって10歳なんだろう？つまり世間からみたらなのは10歳か9歳で子供生んでるんだな。」

「確かにそうなるなあ。」

特に深い意味があった訳ではないからこの話は終わらせることにした

「今日は誰に挨拶に行くんだ？」「まあなのはちゃんの家族とか私の友達とかやけどほんまに仲のよかった人だけやからそこまで時間かからへんよ？何か予定あったん？」

「大したことじゃないんだけどな、ザフィーラやシグナム、ヴィータにまでやらせておくのは少し悪い気がしてな。」

俺がそういうとはやてが頬を引つ張ってきた

「ハルトはもうわたしらの家族やないの、大体みんなが住む家なんやから、ハルト一人に作らせたら逆にこっちが気使うわ。」

「そっか…そうだよな！！ありがとうはやて。なんか俺基本的に一人で生きてきたから結婚していきなり大家族って少し戸惑っていたんだ、でももう大丈夫だ、…ところではやて、今から会う人達の前ではかなり真面目にしたい方がいいのか？」

「なんかハルト、花嫁な父親に会いに行く花嫁見たいやな、」
クスクス笑うはやて

「なるほど、世の中の男は一度はこういう思いをして結婚するのか、」

「そうなんやろなあ、でも今から会う人にはいつも通りで行ってな、こういう人やって教えたいから。」

「わかった。そろそろ行こうか、もうみんな先に行っているみたいだし。」

俺達はなのは達の後を追うように転送ポートの中に入った

第7話（後書き）

感想随時募集中

第8話

第97管理外世界地球

なのはやはやて、フェイト等の数々の有名魔導士が出てきているにも関わらず何故か魔法文化はないという不思議な世界だ

俺の元になったアーサー王とか言う人間もこの星の人間らしい

まあそんな事はどうでもいい

今俺にもっとも必要なことは、挨拶をする事だ

まずははやての最初の友達の月村すずかのところに向かうらしいなのはとフェイトはヴィヴィオを親に紹介しに行った

「ここがすずかちゃんの家や!!」「でかつ!!っていつか猫多っ!!」豪邸って感じの建物がそこにはあった

「あれ、はやてちゃん?どうしたの、今日は何か仕事?」

すずかつて人っぽい人にエンカウント!!

「実はな、来年の春に結婚する事になったねん。」

挨拶すつぽかしていきなり事実だけ伝えるはやて

もしかしたら俺よりテンパってるんじゃないのか?

「はやて、いきなりすぎて相手が困っているぞ?」

「あのお、あなたは?」

「俺はハルトIIグランガイツ、はやての婚約者だ。さつきはいきなりで悪かったな、多分はやてもかなりテンパってるんだと思う。」

その後すずかさんにもう一人の人を呼んでもらってまとめて説明をした

アリサさんにははやてを泣かしたらぶん殴るって言われた

「次はなのはの両親のところか?」

「う、うん。そ、それとな、ハルト。」

さつきからそわそわしているはやて

「どうしたんだ?」

「手つないでくれへん?」

「いつもは繋ぎたがらないのに今日は珍しいな、どうかしたのか？」
いつも俺が手を繋ごうとすると逃げる

「ほんまはいつもこうしてたいんやけど、でも機動6課がある
うちはまだわたしは部隊長や、だからなかなかこう出来へんねん」

「そっか、じゃあ十分に堪能してくれ、久しぶりに手を繋いだ感
覚を。」

それからしばらく俺とはやては無言で歩いた

「あの喫茶店や。」

はやては数十メートル先にある喫茶店を指さして言う

生憎俺は地球の文字が読めないから店の名前はわからん

「はやて、なんて読むんだ？」

「そっか、ミッドチルダにおったハルトはこっちの文字読めへん
か。あれはな翠屋って読むねん」「そうなのか。」

いずれは地球の文字を読めるようにしておくか

その後なのはの両親に挨拶をして俺とはやては町を歩いている

「わたしの知り合いへの挨拶も終わったし今からどうする？」

「向こうに戻ったらどこかの誰かさんが世間体気にしてデートも出
来ないから今からデートしよう」俺ははやてに右手を差し出す、は
やてはそれを握り返した

さっきと同じで無言だったけれどそこには、言葉なんか必要なかつ
た。

「なあ、ここで結婚指輪買って行かないか？」

「ミッドチルダで買ったらいいんと違うん？」

「はやての育ったこの星で買いたいんだ。」

俺とはやては宝石店に向かった

「どれになさいますか？」

正直俺に石の良し悪しなんてわからない。だからはやての事を考え
て一番似合うものを選んだ

「じゃあ、この青いやつお願いします。」

「サファイアですね、かしこまりました。」

店員が店の奥に入ったのを見計らってはやてが話しかけてきた

「なんでサファイアなん？」

「はやての瞳と同じ色だから」

「それだけ？」

「俺は宝石には詳しくないからな、気の効いた言葉は言えないがこの指輪がはやてに一番似合うと思った、それ以上の理由なんて必要ないだろ？」

「ラブラブですね。いいものを見せてもらったお礼に割引しときますね」

「あ、ありがとうございます。」「お幸せに。」

宝石は高かったがちつとも苦ではない…

隣にいるはやての笑顔の為なら

なのは今日は両親のところ泊まるらしいから俺たちは先に帰ることにした。

「ねえハルト？いきなりやけど驚かんといてな？」

「ああ。」

「子供は何人欲しい？」

俺は口の中に入っていたお茶をすべて吹き出してしまった

「ごほつ、ごほつ！！は、はやて少し気が早くないか？」

「式の日程すら決まってる状態指輪を買った旦那様には言われたくないわぁ。」

クスクス笑うはやて

「くっ！！…子供か、リインとアギトは子供みたいなもんだけどやつぱり男の子と女の子一人ずつは欲しいな。」

「わたしと一緒にやな。」

「そうみたいだな。あつ！！もう一つ聞きたかったんだけど家具どうするんだ？まさか何もなしの訳ないし。」

「家具はわたしとリイン、シャマルで選んどくから、早く家完成させてな？」

「大丈夫、みんなのおかげであと数日間のうちには完成させる予定だからな。」

「頼りにしてるで？旦那様？」

旦那様というフレーズが気に入ったのかはやては今日よくこの言葉を使う

「結婚したら旦那様はやめてくれよ？せめて貴方とか名前とかにしておきたいな。」

「大丈夫やって、旦那様って言うのは甘えたい時だけにしとくから。」

なるほどな、つまり今は甘えたいって事か

「どうして欲しいんだ？」

「そーやなあ、じゃあミッドチルダにつくまで時間あるし膝枕してくれる？眠たくて、歩きながら寝てまいそうやわ」

そういつてわざとらしく欠伸するはやて

「約束だからまあいいか、よし来いはやて!!」

「うん!!」

それからしばらくはやては俺の膝で寝ていた

第8話（後書き）

感想随時募集中

第9話

俺とはやてが地球の友達に挨拶に行ってから数日

「ザフィーラ、そのペンキ持ってきてくれ。」

「承知した」

俺たちの家は内装外装ともに終了し後は屋根のペンキを塗るだけになった

「よし、ここを塗ったら、完成だ〜!!」

「なかなかのものやなあ」

「リン達のデザインした通りですう。」

「これが、私たちの新しい家か」「スゲー!!」

「みんな頑張ったものね。」

「見てろよ、あの不動産屋、今から文句を…」

「兄貴はふざけてないで喜べ!!」アギトは俺の事を兄貴と呼ぶようになった

「でも、やっと完成だな。じゃあはやて、リン、シャル家具は頼んだ。」

「任せてや!!」

はやて達は家具を見に行った

俺は家が出来た喜びと疲労困憊で庭に転がって寝た

はやてSide

ハルト達が家を完成させたから家具を買いに来た

「それにしてもまさか1ヶ月であんな立派な家作るとは思わなかったなあ。」

「本当にね。部屋割りはどうするの？」

「そうやねえ、とりあえずハルトを入れて家は8人家族になるから個室は10くらい作ったねん、せやから、細かいことは後できめよ

か。まだ半年くらいあることやし」その日はベッドやタンスなどの大きな家具を買って送ってもらった一応考えてる部屋割りわたしとハルト、シグナムとシャマル、アギト、リイン、ヴィータにしようと思ってる。ザフィーラは一人になってまうけど、子供が生まれたら一緒に部屋にしようと思ってる

ハルトSide

今日は機動6課の最後の日らしいはやて達は解散式に行っているそして俺は、今日退院する、ルーテシアの母親、メガーヌさんの手伝いに来ている

「ごめんなさいね？あの人とルーテシアは先に戻って家の方で待ってるって言っものだから」

親父は籍は入れないがメガーヌさんと結婚してルーテシアの父親になったらしい

「気にしないで下さい。たしかー無人世界のカルナージでしたっけ？また遊びに行きます。」

「その前に、あなた達の結婚式であうんじゃないかしら？」

「確かに、じゃあ2週間後に会いましょう。」

結婚式ははやての誕生日でシグナム達がはやての前に現れた日と言うことで六月四日になった

場所はミッドチルダの首都クラナガンの郊外にある協会、よくわからないが聖王協会の支部らしい

聖王協会のカリム・グロシアがどうしても言うからそこになった後は戦闘機人通称ナンバーズは数人を除き更正プログラムを受けて社会復帰するそうだ

これらが半年間のうちに起きた事だ

2週間後

いよいよ今日となったわけだが、式に参加している人間がやばいゲンヤさんなのは、フェイト、ハラオウン家その他色々

今ここにいる人間だけで管理世界一つくらいなら落とせそうな感じだ

なのはやフェイトははやての方に行っているからいいとしてどうして俺のところにはエリオしか来ないんだ？

「ハルトさん、結婚ってどんな感じですか？」

「言葉じゃ伝えにくいから自分で味わえ、ほらキャラがいるじゃん。」

「ぼ、僕とキャラはそんな関係ではないですから」

「まあそれは冗談だ、お前とキャラは辺境自然保護隊に入るんだろ？」

「はい。ハルトさんはまだ一年休職ですよな？」

「まあな、リンカーコアが使えないからな、まあ槍ならまた教えてやるから家に遊びにこいや、」

この半年間俺は魔力を使わずに戦う為の槍の稽古をエリオにつけていた

「ハルト」グランガイツさん花嫁の準備が出来たのでお入り下さい」

「じゃあまた後でな」

俺は式場に向かった

はやてSide

今日はわたしの誕生日で結婚記念日になる日

「はやてちゃん綺麗だよ」

「ありがとう、なのはちゃん、フェイトちゃん。」

「初めて会ったのが10歳で今日で10年かあ、時間が経つのは早いもんやなあ。」

「そうだね。じゃあ行こっか」

わたしは式場に向かった

第9話（後書き）

感想随時募集中

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8206y/>

リリカルなのは～グランガイツの息子～

2011年12月2日14時46分発行